潮音寺だより

第 249 号
平成 16 年 7月

電 話 052-671-4831
ファックス 052-671-4856
E-Mail:choonji@aichi.email.ne.jp
〈ホームページ〉http://www.ne.jp/asahi/choonji/namo/
〒456-0034 名古屋市熱田区伝馬 1 -10-11

三界唯一心

【出典】『華厳経（十地品）』
第六現前地の経文

覚えず
笑みこぼれる
喜びも

振り上げた
拳震える
怒りも

遣る瀬なき
咽び泣く
哀しみも

心地よき
胸ときめく
楽しみも

いずるは
我が
一心から

芳しき
佳き心を
育まれよ

ハイブリッド

知人から一通のメールが届きました。抜粋して紹介すると、次のようになります。

――「生かされて生きる」とか、「生かされている私たち」という表現の、「生かされている…」という日本語は、正しくないのではないかと感じています。「生かす」＝「殺さない」ならば、「殺されずにしてもらっている」という意味になり、本来、表現したい「頂いた命」「共に生きる」という意味ではないように思うのです。――

この「生かされる」という言葉は、キリスト教では、「復活の主イエスに生かされる」とか、仏教では、「弥陀に生かされている我ら凡夫」という具合に、宗教の方面ではよく目にする表現ありますが。ただ、古い文献には使用例を見かけたことがありませんので、比較的新しい表現であろうと思われます。はたして、疑問を呈した彼の主張は、正しいのか、別に問題ないのか、考えてみることにしました。

ここに一人の漁師が、魚を捕らえてきて、海の浅瀬に生け簀を作り、そこに捕らえてきた魚を放ったとします。この場合、漁師は、魚を殺さず生かしているのであり、魚にしてみれば、とりあえず殺されずに、「生かされている」ことになります。

一方、生け簀の外に広がる大海に住む魚たちはというと、自由に生きているといいつつ、一漁師といった存在ではない、もっともっと大きな存在に生かされているということができます。それは、弱肉強食、種の進化といった、自然の摂理に従って「生かされている」のであり、仏教では、それを法（ダルマ）と呼びます。

その法（ダルマ）の主は、宗派によって、盧舎那仏であったり、大日如来であったりしますが、この場合の「生かされている」は、絶対的な大きな力によってコントロールされているということであり、人為的な「殺されずにしてもらっている」といった次元の意味合いとは異なるものであります。そして、まさにその仏に生かされているという実感は、信仰を得て、はじめて体得されるものであります。

つまり、自分自身という存在を、生け簀の中の個としかとらえ

られず、信仰心がいまだ確立していない状態の人であれば、「正しくない表現」という彼の指摘は妥当かもしれません。しかし、信仰心がすでに確立されていて、自身の存在を、宇宙の中の個としてとらえている人にとっては、「的確な表現」といえるのではなかろうかと思うのであります。

さらに、この「生かされている」という概念は、宗教における救いに関わる問題として、とても重要です。一般に、キリスト教は、絶対者（神）に祈願・奉仕して救いを求める、他力的宗教とされるのに対して、仏教は、自身が絶対者（仏）になることを通して救いを得る、自力的宗教であるとされます。そして、キリスト教的な救いは〈救済〉と呼ばれ、それに対して、仏教的な救いは〈解脱〉と呼ぶことが多いようです。ただ、弥陀の他力を頼る浄土教は、〈救済〉的傾向が強く、キリスト教においても、〈解脱〉的な宗教経験を重要視するものも存在するようです。客観的に見れば、救いの手段・方法は、実にさまざまであるといえます。

話は、がらっと変わって、私ごとですが、このたび、前車が走行距離十一万キロを超えたのを機に、プリウスというハイブリッド車を購入いたしました。ガソリンエンジンと電気モーターを組み合わせた、ちょっと変わった動力機構をもつ車です。

乗っての印象は、すこぶる良好で、特に燃費の良さは、驚嘆するに値します。エンジンとモーターとが、うまく調和されているからでしょう。車と宗教を一緒にはできないかもしれませんが、宗教においても、他力（救済）と自力（解脱）をバランスよく調和させることができたら、素晴らしい教えになるのではないか……。

実は、我が西山の教えは、このハイブリッドな教えなのです。

行業とぼしくとも疑うべからず。経に乃至十念の文あり。はげむも悦ばし正行増進の故に。はげまざるも悦ばし正因円満のゆえに。（西山上人『鎮勧用心』）

どうです。世の中、スポーツカーのような車でないと満足できない方もいますが、ハイブリッド車は、少しのガソリンで長い距離を心地よく走ります。弥陀の救いの確信を得た上での諸行（励み）は、心地よく持続できるものです。

解脱（げだつ）

サンスクリット語のヴィモークシャを意訳した言葉で、煩悩に縛られている迷いの状態から解放されることを意味します。

釈尊の時代から今日にいたるまでインドでは「輪廻」という死生観がいきわたっていました。それは、生きとし生けるものは、現世において行った行為の善悪によって、次の世では五種類もしくは六種類の世界のいずれかに生まれ変わるという思想です。

そのなかで、一番快適な世界は「天界」に生まれることですが、「天人五衰」という言葉もあるように、どんなに長い寿命をもち、快楽を享受できても、やがて寿命がつき、ふたたび死んで、輪廻の世界にもどらねばなりません。今度はミミズに生まれるか、ゲジゲジに生まれるか分からないのです。

ですから、最終的にこの輪廻の輪から脱出しなければ、本当の楽は得られないというのが仏教の主張です。では、どうしたら、輪廻から解き放たれることができるのか。仏教では、結局、私たちを輪廻につなぎとめているのは、私たち自身の中にある煩悩であり、執着であるから、それを滅しなければならないと説いているのです。

（『仏教百科』）

住職通信

ゆとりある
暮らしは
始末する
日々から
生まれる

雑記

▼表紙

以前にも紹介させて頂きました、檀家の安井明弘様のお知り合いの川端吉男様という絵かきさんが、このたび熊野古道の絵葉書を出されました。当方にも頂戴しましたので、扉絵に使わせて頂きました。

▼感謝

彩色灯明のご寄付を、小島鐐次郎様・小島とよ子様・小島千鶴子様・高池やゑ子様・中村鈴子様・江崎一男様より頂戴いたしました。（順不同）

心より感謝申し上げます。

▼目をこすり汗をのごいて老視鏡　沐魚